

2022年3月22日

## 第9回エクセレントNPO大賞 「市民賞」講評

### 1. 審査の視点

課題解決「力」賞、組織「力」賞、と並び、市民賞が設けられています。市民「力」賞ではなく、市民賞としています。かつてないほど、市民性が問われています。ウクライナ危機に直面し、コロナパンデミックに直面する中で、ますます組織における市民性とは何か、NPOに限らずあらゆる組織で問われていると感じています。さまざまな困難を抱える人々との距離の近さを優位に持つと考えているNPOだからこそ、市民性は問い続け、考え続ける深い問いであると思います。

そのような問いがあることを理解した上で、このエクセレントNPOでは市民性を、広く市民の社会参加の意識をどう高め、どう受け入れているかという問いに置き替え、明示的にはボランティア受け入れに関する4項目と寄付受け入れに関する1項目の審査員評価を基本に審査しています。

審査員評価は、提出された5項目の自己評価をベースに、同時に提出された「組織のストーリー」とWebサイトの内容を参照することによって補足・修正したものです。その結果をもとに、審査委員が一同に会して議論を重ね、疑問点を確認しながら、ノミネート団体や市民賞を決定してきました。

提出された書面とWebの内容表現が、審査の全ての情報源ということになります。ボランティアと寄付という行為のみを対象としたことも含め、そのような審査に基づく限定的な意味での「市民性」であることも理解しておいていただきたいと思います。

### 2. 審査結果

#### (1) ノミネート団体

以上のような経過を経て、下記の5つの団体が「市民賞」にノミネートされ、その中から1つの団体が「市民賞」に決定しました。

## ①「二枚目の名刺」

「組織や立場を超えて社会のこれからを創ることに取り組む人がもつ名刺」。それが「2枚目の名刺」で、それを「持つきっかけをつくる」ことをミッションに、このNPOは生まれました。複数の組織に所属して活動することの制度的な制約を改善すべく、行政や業界団体とも取組んでいます。中心的な事業は、社会人とNPOの出会いの場である。

「CommonRoom」と、社会人が期間限定でNPOの事業推進に取り組む「サポートプロジェクト」です。すでに延べ5000人近い社会人が150団体を超える協働NPOに参加しています。無償で運営に携わる人や社会人として参加する人が、ここでは広い意味でのボランティアと言え、活動のコアです。オンラインでの活動の整備も進め、特定技能でマッチングをおこなうことよりも、フィット感を重視した運用は、10年にわたる活動の蓄積や年間計画の中で、戦略的に対応されています。

## ②「海外に子ども用車椅子を送る会」

2回目の応募である「海外に子ども用車椅子を送る会」は、創設者の実体験、子ども用の車いすが子どもの成長に合わせて買い替えが必要で、廃棄は有料である。しかしながら高価で、海外では手に入れることが難しいことに対して、何とか役立ちたいという想いを実行させ、継続している活動です。現地でも廃棄になってしまっただけでなく、寄贈ではなく貸与とし、車椅子の清掃、整備にボランティアが参加できます。寄付の参加もありますが、特出すべきは、大学と連携し、海外ボランティアも活動できるように、HPも英語も作成していること。コロナ下で、活動日を月1回と固定していたが、少人数で毎週できるように工夫も行っていきます。

## ③「さわやか福祉の会・松戸くらしの助っ人」

20年以上にわたり、市民互助型在宅福祉サービスを会員制の有償ボランティアで運営しています。ボランティアの高齢化が課題となっている団体が多い中、他のNPOとの協働で高校生、大学生などへの募集もしています。地域密着の特性を生かし、SNS、HPでの募集のみならず、行政からの紹介、口コミからの参加が多いのは、これまでの活動の信頼と外にも開いている相乗効果の表れだと評価しました。ボランティア参加した後に全員反省会（お茶会）があり、学生にはレポートとしても提出してもらっていることは、ボランティアのみならず団体へのフィードバックとして重要です。

#### ④ 「ハナラボ」

ジェンダーバイアス解消のため、女子学生のためのウェブマガジン「ハナジョブ」を2008年にリリース。学生記者とともに、社会で活躍する女性(非伝統的な役割を担う女性たち)を取材し、新しい働き方・生き方を提案しています。学生レポーターも活動を支えるスタッフ(20名)も、ボランタリースタッフとして活動しており、活動に共感するOGや社会人サポーター(チア)も40名程度となっています。2019年からは、これまでの蓄積をベースにさらに知見を広く共有するため研究も進めています。記事を書くためのオンデマンド講座など、具体的にノウハウが習得でき、それが団体のミッションでもある女子学生が自分の潜在能力に気が付きエンパワメントされることにつながっています。組織の中でPDCAサイクルがうまく機能しています。

#### ⑤ 「こども緊急サポートふくしま」

NPO法人こども緊急サポートふくしまとしての設立は、2020年4月ですが、2006年から行政からの福祉に関する補助金を活用し、地域福祉を実践しています。現存の行政による福祉サービスの活用のみならず、生活者として必要なサービスは行政にも働きかけを行い、サービスを作り出す活動もされています。子育て支援に継続的にかかわる有償ボランティアスタッフ、単発ボランティアスタッフと、サービスを利用する会員など、こども緊急サポートに参加する入り口を多様に用意されており、これまでの蓄積をもとに、HPで、有償ボランティアについて説明がされています。今後の課題は次世代への事業継承とボランティアの若返りであると、明記されています。このような形でエクセレントNPOに応募いただき、自組織を自己評価いただくことも課題解決に向けた方策の一つになると考えます。

## (2) 市民賞

以上5つのノミネート団体の中から慎重に議論を重ねた結果、特定非営利活動法二枚目の名刺を市民賞に決定しました。市民賞の審査項目すべてにおいて審査員評価で最も高い評点が得られ、Webからの参加にも工夫があり、働き方、活動方法に多様な選択肢が感じられました。プロジェクト開始前、中間、最終報告会と機会をとらえて振り返りの機会を、メンバー事にも設けていることにより、ひとりひとりが「思い」、「感謝」、「変化」を伝え合えることは、信頼関係をきづきます。今年度より、規約を改訂し「寄付・賛助会員制度」を新たに導入されました。大事な参加のツールとして、運用されることをますます期待します。

### 3. 今後に向けての期待

今回ノミネートされた5団体は、年間の収入規模は200万円弱から1000万円弱と、事業中心のNPO法人と比較すると小さな団体でしたが、活動が与える影響は、活動地域に深く根差すものから、日本を越え海外の現地サポート団体と協働で行うものまで多岐にわたりました。いずれも寄付者やボランティアを単なる資金や役務の提供者としてではなく、団体の参加者や構成員として捉え、丁寧にフィードバックしている様子が伝わってきました。コロナ下にあっても、コミュニケーションを絶やさないための工夫があり、ウェブやSNS、リアルの場合とオンライン空間による参加の工夫は、他の団体にも参考になることが多くありました。

組織の市民性とは何か、参加のデザインとは何か、については、ボランティアや寄付のありように限らず、多様な要素があると思います。今回の審査を通じて実感したことは、活動内容そのものが、これまでの常識を疑い、ひとりひとりに寄り添って、拘って進めているということです。創設者の強い市民社会への思いや志しとともに活動を継続させる中で、市民性を育む視点が必要になっていることを感じました。

市民賞なのか、市民力賞なのか、受賞者とともに議論を続けていければと思っています。